

『もう一つのあきらめられない夢』

— 韓国と日本、そして世界についての21才の小さな想い —

ムン ソラン

文 瑞蘭

〈1995年7月のある日の日記〉

『そろそろ帰らないといけない。』

今朝、明ける空を見ながら聞くニワトリやら鳥の鳴き声は妙に特別な感じでぶつかってくる。ひたすら続く並木道、田植えの終わった田んぼの緑、それときれいにマッチしている煉瓦色の屋根の農家、寮の窓の向こうに見える西条の平和な田園風景は、鳥のさえずりとともに完璧に一つの風景画をなしている。

ずっと都会で育った私は、西条についた瞬間、目の前に開かれている田舎の風景に、少なからず、びっくりしていた。生活の不便や文化施設の不足という田舎の欠点をどうやって克服していったらいいのか不安に思われてきた。しかし、そういう欠点を克服できる要領が分かった今、私はこの西条の緑が死ぬほど好きになってしまった。そして、この緑ともそろそろさよならだねって、無性に寂しい感じになっている私がいる。

昨日、親友Tから電話がかかってきた。一年間、日本で世話になった友達。一年間の留學生活の支えになってくれた人。

“ソラン、むこうにいつ帰るんだっけ。確か9月だよな。”

“うん、9月の半ば頃かな。”

“もうそろそろ帰る準備しないとね。”

“うーん、そうなんだけど、何か最近、私ね、すごくあせってしまう。帰る前までにこれもしないといけないとか、あれもしないといけないとか、この友達だけには連絡しないといけないとか、そういえばその方にも連絡しないといけないとか帰る前にやっておかないといけないことが今になっていきなりいっぱい見えてくるの。”

I. 前書き

日本、広島、広島大学、それも西条キャンパスでの生活は私自身にとって私のこれからの人生にとってとても貴重な経験や修練の場であり、時間であった。

この一年というのは、日本語や日本文化を学ぶにはもちろん、外国での一人立ちという点で、私を一人前の大人として成長させるかけがえのない絶好のチャンスだったのである。

(2)

親の保護から離れ、何もかも一人で考えて決めないといけないというのや、新しい文化に触れるということ、また新しい人と知り合っただけでその人々と友達になっていくというのは、あるときは負担になったりもしたけど、結構、興味津々で楽しい作業でもあった。

ほぼ一年間で、韓国で5年以上かかって経験できるようなことを経験してきたんじゃないかなと思う。本当にいろんなところを回って、いろんなことを見て、いろんなことをして、いろんな人に会って話しをしてきた。そういう様々な出来事の中で結構大きな割合を占めるのは、日本の中の韓国人としての体験であった。

今からは、そういう体験とその体験の中で感じた韓国と日本、そして世界についての小さな想いを述べようと思う。

II. 日本の中の韓国人として

私の留學生活の大半は、韓国にいる間やってきた釜山大学での日本人との交流の延長としての活動と深化、そして、交流活動においての韓国からの特派員のような役割であった。私は日本に来る前、釜山大学日語日文学科で三年生の前期まで勉強していた。その時私は、韓・日比較研究会のメンバーとして活動していた。

韓・日比較研究会とは、釜山大の日語日文学科に属するサークルとして、日本と韓国についての研究や日本人との交流のことを考えていくサークルである。このサークルで、日本の歴史や日本事情、韓国と日本の懸案問題を勉強しながら、日本の大学生の集まりであるKim'papの会とか山口県の柳井市の方々との交流の場を設けて活動してきた。その時知り合った方々や友人は、私の日本での留學生活を色々なところから助けてくれたし、その方々や友人と過ごした時間は私にとって日本語はもちろん、日本や日本文化を理解し韓国と日本との関係のことを考えるにおいてとても貴重な時間であった。彼等は日本で珍しく、韓国に関心を持っている人々である。ただ関心を持っているだけではなくて、自分から韓国との交流の方法を見つけて動く人々である。その方々は、私をただ一人の外国人ではなく、自分たちの仲間に入れてくれたし、地域社会の一員としてのいろんな活動の場を設けてくれたのである。

今から紹介するKim'papの会や柳井市、その人々と一緒に活動した活動歴は、大学での勉強とは違う私の日本文化の学習歴であり、小さな韓・日両国の文化交流の跡でもある。その詳しい活動の内容は下記の通りである。

その一、Kim'papの会との交流活動

Kim'papとは韓国語で“海苔巻き”のことである。これは第二次対戦中に日本から韓国に渡り、今では韓国のポピュラーな食べ物として定着している。この名称には、

海苔巻きが戦争が終わった今も排斥される事なくその国の文化として残っているように、現在、韓日両国の間の様々な問題を越えて、良いものは良いものとして認め、未来へ向けもっとお互いを理解しようとする姿勢を持つとうという意味が込められている。

K i m' p a pの会とは、次のような活動目的を持つ会である。

- (1)参加メンバーは、自らの旅のテーマを一つ決め、一人もしくは二、三人の小グループで自分の知恵と足で韓国を訪問してみる。
- (2)韓国の青年、大学生との交流、またコンパの場を設定する。
- (3)帰国後、個人、グループの経験を交換し合い、レポートをまとめる。
- (4)それぞれが関わる場で活動を報告し、経験をさらに共有化する。

上記のような活動目的を持って活動しているK i m' p a pの会と私とのつながりは韓国にいたるときから日本留学期間までずっと続いてきた。1994年12月2、7、8日にはK i m' p a pの会大阪地区が開く『国境の越え方－邪魔しているのは海だけではないはず』という題の講演会で演士の一人として参加する機会を持つことができた。この講演会では私が持っていた日本に対してのイメージや日本に友達ができてからの私の生活や日本に対しての考え方の変化、私が願う韓国と日本の関係発展の方向などを率直な気持ちで話した。この講演会に参加してから大学に合格してK i m' p a pの会に入って来た新入生と再会できたのは本当に大きな喜びであった。

以下に紹介する文章はその講演会で発表した内容のまとめであり、釜山大とK i m' p a pの会の共同文集『これから』に載せた文章でもある。

『あきらめられない夢』

● I R O N Y

世の中ははっきりなしに変わっていくし、その中で人間も言うまでもなくいろんな方向に変わって行く。

誰でもそうかもしれないけど、私は何かを思い出させてくれるきっかけに出会ったら、そのきっかけにしたがって私の頭の中は果てしなく走ってしまう癖がある。そうして、私は幼いときのいろんな出来事を経てから、やっと今の私に気づいてしまう。

今日もほんの小さなことがきっかけで幼いときのことを思い出してしまった。抗日闘士の偉人伝を読んで日本に対しての怒りが燃え立った幼年時代。おばあさんとかイモ（韓国語で「母の姉妹」）の「倭政時代」の話。戦争のとき、米を日本に全部取られて家族が餓死するしかなくて、日本警察の目を抜けてこっそり米を闇で買って帰ってくる途中、日本警察に捕まってむごい拷問を受けるなど、ひどい目にあった私のお

ばあさんは、亡くなるまで決してモンペをはかなくてチマチョゴリだけに固執していた。“ウェノムドル（日本の奴等）が滅びるのを見て死ぬのが私の願いだよ。世の中、他の所には行っても日本だけには行かない。”と口癖のように言っていたイモ。

そういう彼女たちの後裔である私は今、日本語を専門にする大学生になって日本の土を踏んでいる。何か妙に歴史という存在を感じていながら、それはちょっと歴史の *irony* ではないかなと思ってしまった。

●日本語を専攻するに至るまで

私が日本語を大学で専門として勉強しようと思ったきっかけの中で一番大きなことは、日本が、嫌いだったからである。幼年時代から聞いた日本人の蛮行、毎年3月1日（三・一独立運動記念日）、8月15日（光復節、独立記念日）になる度に見る特集TV番組に出る残酷な拷問のシーン、日本に圧迫され散々苦勞する我が民族の惨めな姿、学校で学ぶ日帝時代の歴史…。

確かに日本は憎くて憎くて仕方がない国であったし、今考えると笑ってしまうことなただけで、日本でのひどい地震や津波の被害についてTVで放映されたとき、おさな心にすごく喜んだこともあった。でも、日本は立派な経済大国としてぐんぐん伸びていったし、そういう事実を聞いていた私はとても悲しい気持ちになって、日本という国に嫉妬してしまい、私の国じゃなく日本に豊かさと繁栄を与えた神様を恨んでしまった。

こういう私は、日本に対する最小限の抵抗として、日本製品は絶対に買わなかったし、たまに日本の厨房道具を買ってくる母親に文句を言ったりして、政府の国産品愛用運動に参加する愛国者になったりもした。

私の中での日本はそういうイメージで始まって教科書歪曲事件、対日貿易逆潮、従軍慰安婦など決していいとはいえないものが交わってイメージを形成していった。そういうとき高校で第二外国語で日本語を学び始め、私の家の中に日本NHKの衛星放送が入ってきて、私の中では反日感情と好奇心が混在しながら、だんだん日本に対する関心が高まっていった。その途中にマスコミには日本の文化侵略論が台頭して、第二の日本の韓半島侵略まで論じる声が聞こえた。そういう高校時代に、私の日本についての関心と、私の国と日本の微妙な関係・つながりは私をしてかなりの重さで考えさせたし、結局は“じゃあ、私の若い時代を、日本っていったいどういう国かを勉強するのにかけてみよう”と思うに至って、大学で日本語を専攻することになったのである。

●Kim'papの会との出会い

私が初めてのKim'papの会と縁を結んだのは1993年の夏。

1993年の夏の私とKim'papの会の出会いは、確かに私の生活での大きな変化の出発点であったとあえて言わせてもらいたい。1993年の夏から現在の1995年の1月までを振り返ってみると、人間ってここまで変化できるものかなあって思うてしまうことがある。Kim'papの会との出会いは“新鮮な感動”そのままであった。韓国を知ろうとする日本の学生たちの純粋な誠意と努力に私はつい感動してしまった。自らサークルを作って韓国について勉強し、自分の力と足で韓国を訪問する。ただそれだけで終わるというのではなくて韓国訪問の体験と感想、自分の考えを文章に書いて本まで作る。専門のカメラマンが交流会の現場をビデオにとって日本に帰り報告会をして次期の会員を募集するというKim'papの会の活動は、私にとってとても新鮮な衝撃として感じられた。

ちょうどタイミングがよかったのか、Xday（釜山の学生とKim'papの会の学生との交流会）が終わってから約1ヵ月後、福岡に日本語スピーチ大会に参加しに行ったときの河野君（Kim'papの会の会員）との出会いは、また私とKim'papの会とのつながりをもっと緊密にしてくれた。河野君が私の家にホームステイしたのは、私の家族にも、珍しくとてもいい経験になったし、Kim'papの会と釜山大との交流会について考えて話し合うとてもいい経験を与えてくれた。

それ以来、うちの学科（釜山大学・日語日文学科）でも前々から考えていた日本について研究する研究会が積極的な努力によってだんだん形を表すことになり、今の私が所属している「韓日比較研究会」が誕生するに至る。この会は日本についてもっと深く勉強して、日本との交流をもっと意義のある、中身のあるものにしていくのを目指している。私はこの会の誕生にKim'papの会の影響が少なくないと思っている。

●第三回 韓・日学生交流会を準備しながら

1994年8月18～20日に確定された第三回韓日学生交流会の準備が少しずつ進行されていった。第二回交流会の問題点は、韓国側にKim'papの会に対応する会がなかったために、国際的な行事としては事前準備と体系性が足りなかったことだと判断した韓国側のスタッフは第二回の限界を乗り越えようといういろいろ工夫していった。

準備はそれなりに順調に進んだけど少しずつ問題点も表れ始めた。特に一番いろんな問題を感じさせて、代表であった私を一番困らせたのは歌合戦の準備であった。

韓国人は日本の歌を、日本人は韓国の歌を歌って、もっとお互いの文化を理解し合おうということと、交流が日本語だけで行われているという仕方がない欠点をちょっとでも補おうという趣旨で企画した歌合戦についての日本側の反応はあまりよくないという便りが伝わってきた。

反応がよくない理由は、韓国語の専攻者じゃない人がたいていの日本側にとって韓国側で歌を歌うのは非常に難しいということと、人の前で歌を歌うのにあまり慣れて

ない日本の文化的な環境が歌合戦を難しく思わせる原因のようであった。

また日本側の歌合戦の準備過程での行き詰まりは私を最後まで困らせたし、がっかりさせた面でもある。

－ 中略 －

Kim'papの会と釜山大との交流においてこれからはもっといろいろな問題とお互いに対しての不満が提起されるかもしれない。それは交流が発展すればするほど出てくる不可避な問題だと思う。こういう問題をうまく解決できる方法としてはいろいろなことがあると思うが、一番よい方法を言いなさいと言われてたら、私はあえてお互いの友情だと言いたい。お互いを心配し、理解しようとする気持ち、それさえあれば、これから出てくる問題を何とか解決していけると確信する。これは1994年12月に行われたKim'papの会合同会議の準備過程で改めて確認することができた。仕事前に個人的に人間的な連帯を持つというのがいかに大切かというのは合同会議を準備した人はみんな分かると思う。Kim'papの会内部でもKim'papの会と釜山大の交流においても友情と人間的な紐帯を忘れない私たちであるように心から願っている。

● 友達と私の悩み

私が留学する直前に山口県の柳井市の方々が釜山大に訪れてきた。Kim'papの会の交流と似ているけど、ちょっと違った形で3年前から交流が行われていた。その交流会の時にうちの学科の青柳先生が質問を投げた。

“韓国と日本だけではなくて世界の国々を見ても隣の国同士はいつも仲がよくないです。また、韓国人が日本に関心を持ったり、日本人が韓国に関心を持ったりするのは、両方とも変な目で見られやすいですね。いつまでも、このままではまずいと思います。みなさん、どうしたらいいとおもいますか。” って。

その時、私はこう答えた。

“友達を作ることです”

私の友人は“友達を作るだけではなくて、日本についてあまり知らない周りの人々に自分が感じた日本の友達について話すことです。”と答えた。

私は日本に友達ができてから、小さな悩みができた。

日本政府と私の友達という二重構造をどう心の中で整理して考えればいいのかという悩みである。どこでも政府は悪いもんだと言われているけど、少なくとも私にとってはどこでも政府は悪いもんだという説明だけでは納得が行かない。けれども、私のこういう悩みの一隅では、これからの韓国と日本の間には、これ以上悪いことは起こらないという確信のような思いが生じていて私の悩みを慰めている。いつかは悩みより確信のほうがもっと大きく、明るく光ることを心から祈っている。

もし、韓国と日本に戦争が起こるんなら、私は日本にいる友達の顔がまず思い

浮かぶだろうし、日本の友達も私たちの顔を思い浮かべるだろう。それで、お互いの政府にそんな馬鹿な戦争なんか止めて下さいって、力を合わせて嘆願しに行くんじゃないかなと思う。でも戦争なんかは起こらないと信じたい。そういう両国の平和と平等の関係作りは、私たちの課題だと思う。

●友達と自分の世界の広がり

Kim' p a p の会と縁を結んでから、日本語を勉強して本当によかったと最初に思った。こんなにいい友達がいっぱいいるのに、もし、私が日本語を勉強しなかったとしたら、その友達と出会う感動とうれしさを分からないまま生きているんじゃないかと思ったら、日本語が勉強できた状況に本当に感謝する。

外国語を学ぶというのは、外国語を学ぶ人の考えやものの見方、活動領域などの想像を超えるほどの変化や広がりを暗示していると思う。私の場合はまさにその通りだった。気づいてみたら、いつの間にか、私の机の上は日本の友達からもらった日本の本、日本の曲の入ったカセットテープ等のプレゼントや日本のおみやげだらけになっていた。また、一週間に一度ぐらいは、うちのポストに日本からの手紙が入るようになったし、逆に私も日本に手紙を出すために一週間に一度は必ず郵便局に行きまくる生活になっていた。今は、身の回りのものだけではなくて住んでいるところまで変わってしまった。

何よりうれしいのは、日本語を勉強して、日本の友達と話して、日本で生活して、今まで気づかなかった私の国のことが少しずつ見え、また感じられるようになってきたことである。それは日本の友達にも同じことが言えると思う。そうしながら、だんだんと今まで気づかなかった自分のことも分かってくるだろう。日本の友達にも韓国語が分かる人がどんどん増えて、自分の前に開かれる新しい世界を是非体験してほしい。

●友情

今は日本にいる。親元を離れたのは初めて。生まれて初めての一人暮らしが外国で始まったのである。韓国にいるときから続いている友達との友情とその友達の心配してくれる心はいつも私の心強い支えになっている。

国が違って、お互い育った環境が違って、お互い理解する心さえあれば素晴らしい友達になれる。こういう感動を一人でも多くの人に味わって欲しい。その感動は必ず自分の中で輝いて、今まで気づいてなかった自分を見つけさせてくれるだろうしもっともっと広い世界が自分を歓迎してくれるだろう。

●韓国と日本

この間、韓国の母親の親友、洪さんから手紙が来た。

“人間は何で父母兄弟がいてもまた友達を懐かしがるのかなあ。母でも解決できないし、愛する人でも解決できないし、子供がいても解決できない…。その全部を合わせても、ついつい、時々、あるときは長く、あるときは短く、さみしいと思うときはいつでも間違いなく友達が懐かしくなる。しかし、幼いときの友情には葛藤が多い。嫉妬するし、競争するし、自尊心に傷つけられ、劣等感が刺激され完全な友情を育てるのはみんな未熟である。人は40代を越えてからやっと初めていい友達になり、いい友達を持っている基本的な資質を備えることができるのではないかと思う。”

韓国と日本の関係を思う度にいつも受ける印象は、まだお互いが幼年時代の水準に留まっているのではないかということだ。嫉妬するし、競争するし、自尊心に傷つけられ、劣等感が刺激され、葛藤で悩む、まだそういう関係にあるような気がする。

韓国と日本、両国がもっと友好的な関係になれる道はお互いもっと成熟した大人のやり方をやっていくことだと思う。

●変わって行く世界と私の夢

世の中のすべては変わって行く。私も、韓国も日本も両国の関係も。

そのすべてが変わって行く中で小さな夢があるとしたらKim'papの会と釜山大の交流がいつまでも続けられ、韓日関係発展に役立つようになることと、私たちの子供も孫もお互い友達になり、新しい世界と出会う感動を味わって欲しいということである。たとえ、それがあまりにも理想的であったとしても、私が生きている限り、この夢を決してあきらめられない。

その二、柳井市との交流活動

1992年から、毎年、夏休みになると、釜山大学生は柳井市を訪問してホームステイなどによって、日本人の生活や日本の文化を学び、交流する機会を持つ。また秋になると、柳井市民が釜山や釜山大学を訪れ、釜山大学生が柳井市でしたような活動をする。このように、釜山大と柳井市は深い交流を続けている。

広島大学への留学は、留学期間中に、地理的に柳井市の方々としょっちゅう交流できるよいチャンスになったと思う。また、柳井市の方々は、私が広島大学に留学するのが決まってから広島や広島大学についての情報を教えてくれたし、日本滞在中にいろいろな形で交流したいという気持ちを伝えてくれた。日本に来てからは歓迎会を始め、お祭り、成人式や結婚式など日本人の生活文化を身近なところで見て、体験できる機会を与えてくれた。

今でも忘れられない思い出は、結婚式に柳井の方々と一緒に、スタッフとして働いたこと。それ以外にも、小学校を訪問して、いきなり一日教師をするように頼まれて、子供の

前で授業したり、掃除や給食、遊びを一緒にするなど、子供たちと一日中生活を共にしたり、柳井市で、釜山から来た友達二人と一緒に講演をしたことなどたくさんある。

Ⅲ. 21才になって、日本で見えてきた「韓国と日本」

Kim' p a pの会の友人や柳井の方々など韓国に関心のある人々と一緒にいると、もう既に韓国と日本はすごくいい関係になって、これ以上することはなくなっているような気がする時がある。

しかし、一足後ろに立って客観的に周りを見ると、それは単なる錯覚に過ぎなかったということに気づいてしまう。まだ、お互いの国を不信と偏見の目で見ている日本人や韓国人は少なくないし、渡辺美智雄氏のように何回も繰り返されている日本の偉いさんの妄言は、韓国国民の反日感情を絶え間なく刺激している。それどころか、何の罪もない朝鮮人学校の女子学生が、電車の中で制服のチマチョゴリを切られたりする。戦後50年を迎えている今、韓国では“日本は相変わらずその程度の国だ。”という冷たい見方が不幸にも広まっているようである。

けれども、いつも感じられるのは、韓国の人々は、いい意味でも悪い意味でも日本に対してかなりの関心を持っているということである。去年、韓国の出版界を強打した『日本はない』という本と『日本はある』という二つの本は、韓国人の日本に対する関心を象徴的によく表しているものだと思う。

“日本は感情的には憎いけど、無視できないすごい国”という見方が最も一般的である。今、韓国で日本語を勉強している人の数、韓国の大学にある日本や日本語関係の学科の数、また韓国から日本に来る留学生の数は、驚くほど多いものである。しかし、その反対の場合は比べものにならないくらい少ない。

普通の日本人は韓国と言えばキムチや焼肉ぐらいの知識を持っている人がたいていであった。日本人の韓国に対しての関心は、韓国人である私にとっては率直な気持ちで寂しいくらい少ないものであった。

Ⅳ. もう一つのおきらめられない夢

国際関係って国の経済力にすごく左右されているのをいつもつくづく思っていた。こういうのって、自分の国から離れて外国に出てみるともっと痛感できるのが分かった。

韓国の大学生はほとんど外国語、特に、英語にとってもこだわっている。なぜかというところ企業の就職試験や大学院試等、英語の試験がないところがほとんどないし、それだけではなくて就職しても英語や日本語の実力で昇進などが決められる職場が多いからである。もっ

(10)

たいないぐらい、必要以上の時間とエネルギーを英語の勉強に費やしている。本当に悲しい現実だとも思っていた。しかし、うらやましいことに、日本の大学生は就職するために英語にこだわらなくてもいいそうである。その詳しい理由や事情はよく知らないけど、多分、経済大国日本に生まれたおかげじゃないかなと思ってみた。

韓国人が英語や日本語の勉強に熱心であるのや、日本人が英語には熱心でも、韓国を含め他の国の言葉にそれほど興味がない一番大きな理由は、やはり、アメリカや日本の経済力の影響だと思う。

けれども、私は国の経済力に影響されない平和で平等な世界を夢見ている。中学校のときから自分の意志とは関係なく英語をやらされる今の日本や韓国のような現実よりは、自由に自分が興味のある国を選んでその国の言葉や文化が学べる世界になれるように心から願っている。

これは、世界各国の友達と付き合い、いろんなことを見て、聞いて、感じて、考えながら、日本で二十歳から二十一歳までの青春を過ごした一人の女の子のもう一つのあきらめられない夢である。